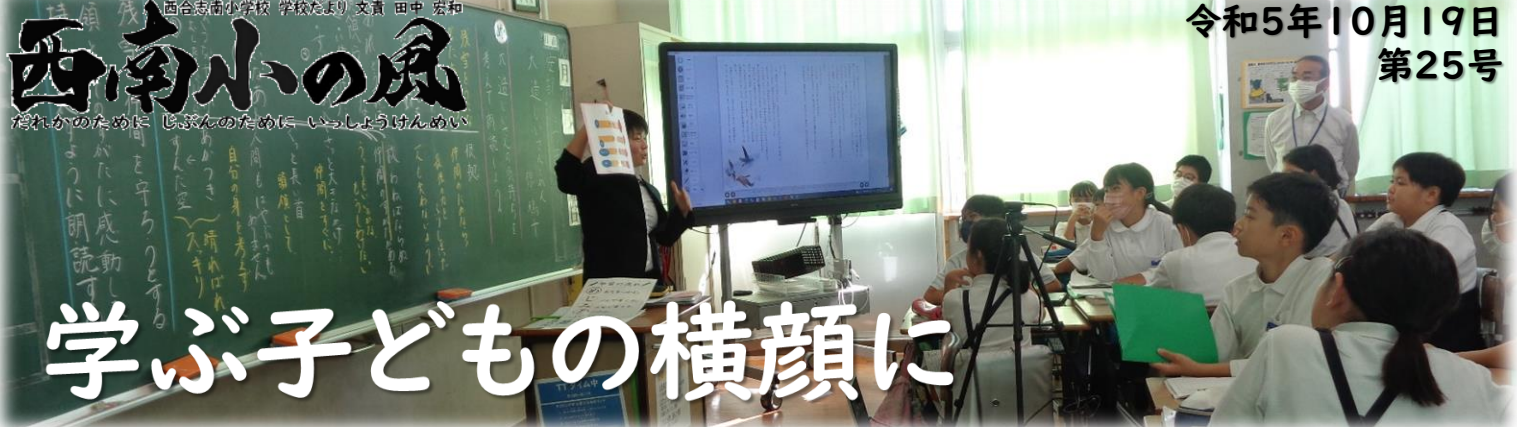



学ぶ子どもの横顔に



十八日は五年四組の研究授業でした。我々が「大研」と呼ぶ校内では一番大がかりな研究授業です。題材はみなさんご存じの『大造じいさんとがん』（椋鳩十）です。「みなさんご存じ」と書いたのは、この作品は小学校国語科の伝統教材で、ずいぶん昔（おそらく昭和五〇年前後か？）から掲載されています。他にもこのような伝統教材は、『スイミー』（レオ・レオニ）、『ごんぎつね』（新美南吉）、『やまなし』（宮沢賢治）などがあります。中学校でも『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ）、『走れメロス』（太宰治）、『故郷』（魯迅）などがあります。覚えておいででしょうか。

どれも魅力ある読み物教材ですので、研究授業ではなくても教師は力が入ります。ネット上を見れば、全国の先生方の数え切れないぐらいの実践があります。小学校の教師であれば、誰もが一言を持つ教材なのです。いろいろな実践がある分参考になってきて、やりやすくなるし、偉大な実践がたくさんある分それらと比較されて、授業者として鍛えられる教材です。この『大造じいさんとがん』を、研究授業の教材に選んだ鎌倉教諭のチャレンジ精神は、初任三年目という節目を大事にしようという気持ちの表れだと捉え、私もエールという名の「庄」を送ってきました。

授業構想は夏休みから始まっていたようです。こっそり日曜日に学校に来て準備する姿もありました。十日ほど前に提出した学習構想案（授業の計画）に、たくさん朱を入れて返す嫌な校長もいたらしいです。前日は合志中学校校区の小中一貫教育研究発表会でしたが、人の授業を見ている場合ではない様子でした。



そんなこんなで迎えた授業本番、何よりも素晴らしかったのは五年四組児童の授業態度です。やはり子どもたちは言わなくとも分かっているのです。この授業が、我がが担任の晴れの舞台、いや正念場なのだ。明るい返事、積極的な発表、真剣な聞く態度や考える様子など、どれをとっても「分かるう」「担任の意を汲もう」と必死です。我々はこのように子どもたちの誠実に感謝しなければなりません。このような子どもたちの学ぶ横顔を見られただけで、鎌倉教諭は幸せ者です。

さて、そうした良かったことはとりあえず脇に置いて、これは研究授業ですから授業後は研究会があります。今回は菊池教育事務所からも授業を見に来られて、最後にご指導をいただくことになっており、そのことが鎌倉教諭にとって大きな緊張の種となっていたでしょう。研究会では、本校職員から次々と今回の授業についての課題が出され、笑顔で厳しく追究（追及とも…）されていききました。この「笑顔」が本校職員の優しさであり、恐ろしさでもあります。

授業研究に終わりはありません。今日の授業は良かったなと自分で思っても、授業を受けるのは子どもたちですから、本当に良い授業だったかは客観視が必要です。そもそも、今日は良い授業ができたと思うことはほとんどありません。（少なくとも私はそうでした）もっとこうしたら、あの時こうしていればという「たられば」が、すぐに頭に浮かびます。教育のプロを自認すべき私たちは、日々の授業によって研鑽を積みながら、子どもの誠実に少しでも報いていかねばなりません。

担任を「よろこばせよう」と頑張る子どもたちの真摯に学ぶ横顔と、職員室では大声で「ワッハッハ」といっても笑ってばかりいる鎌倉教諭の真剣な表情を見られたことが、何よりの収穫でした。